

概要

労働経済学

川田恵介

Table of contents

1	労働経済学	1
2	労働市場	2
3	頑強な手法	2
4	因果効果	2
5	他科目との関連性	3
6	R 実習	3
7	課題	3
8	参考文献	3
	Reference	4

- 「自身で労働経済学分野の実証論文を書く」技術を身につけることが目標
 - 実証手法/応用の理解に重点
 - [参考ページ](#)

1 労働経済学

- 大きな関心は**労働市場**とそこに関連する現象の理解
 - 広義の家計内/企業内の意思決定 (結婚、出産、人事制度等) についての研究も多い
 - * マクロ/人事/人口/家族の経済学との隣接分野

- * 最終的には**政策的含意**を得たい
- 大規模なデータを用いた、実証研究が中心
 - 統計モデルの定式化に対して、頑強な手法/解釈を相対的に重視

2 労働市場

- 生産のみならず、分配にも決定的に影響
 - 大部分の現役家計は、労働所得に依存
 - * \longleftrightarrow 土地/金融市場
 - 不平等が大きな研究課題
- 労働力は異質性の大きな投入物
 - 買い手 (企業) と売り手 (労働者) のマッチングも主要論点

3 頑強な手法

- 比較的容易に大規模データへアクセス可能
 - よりデータ主導のアプローチが採用されやすい
- 集団の特徴解明や集団間の比較について、繊細に議論
 - 分析単位の”匿名性”が高い
 - 例: 中年男性は、中年女性に比べて、就業率が高い
 - * \longleftrightarrow (入門的) 国際貿易: サウジアラビは原油を輸出
 - 一般に個人差が大きく、微妙な違いしか存在しない
 - 例: 平均的な中年男性よりも賃金が大きく高い/低い中年女性は、数多く存在

4 因果効果

- 政策的含意の中核
- 「社会になんらかの介入を行なう」ことの帰結は？

5 他科目との関連性

- 計量経済学との関連性が特に高い
 - 復習/実践における注意/実装/別解釈を提供
 - 計量経済学 II(北村周平, OSSIP) との関連性が最も強い
- 労働経済学に限らず、“データ分析”を学びたい受講者も歓迎

6 R 実習

- 講義を復習しながら、実際に分析コードを作成
- IDE としては、以下の順番でおすすめ
 - R/Rstudio を自身の PC にインストール
 - Google colab (クラウド環境)
 - * Google account が必要

7 課題

- 合計 3 回のレポートにて成績を評価
- 過去の講義資料は[講義レポジトリ](#)から入手可能

8 参考文献

- オンライン
 - [CausalML](#)
 - [作成中の日本語解説](#)
- 紙
 - Aronow and Miller (2019)
 - Angrist and Pischke (2009)
 - Angrist and Krueger (1999)

Reference

- Angrist, Joshua D, and Alan B Krueger. 1999. "Empirical Strategies in Labor Economics." In *Handbook of Labor Economics*, 3:1277–1366. Elsevier.
- Angrist, Joshua D, and Jörn-Steffen Pischke. 2009. *Mostly Harmless Econometrics: An Empiricist's Companion*. Princeton university press.
- Aronow, Peter M, and Benjamin T Miller. 2019. *Foundations of Agnostic Statistics*. Cambridge University Press.